

地中海古代都市の研究 (92)

デルフィのトロス調査 1996 (3) 入口の復元

正会員 ○伊藤重剛¹⁾ 林田義伸²⁾ 堀内清治³⁾
岡田保良⁴⁾ 星 和彦⁵⁾

1 はじめに

今回調査したトロスの内陣入口には、大理石の一枚岩による敷居が残っている。シャルボノーとコットロブによるフランス隊の調査報告¹⁾には、この入口の現状が詳述され、現状図面が掲載されている。しかしながら、寸法記述はあまり十分ではなく、復元の検討はなされているものの復元図は作成されていない。したがって本稿では、詳しい現状報告をしこれに基づいて推定される入口周りの復元を試みる。

2 現在の状況

2-1 概況

敷居部材は、巨大な大理石の一石からなる。西側半分と東側に大きく割れ、さらに東側半分は内側の隅部と前面の一部が小さく割れており、全体で大きなブロック2個と小さなブロック2個の合計4個のブロックから成っている。全体的には中央部分が大きく破壊され欠損しており、両端の部分は比較的良好に残っている。中央部分の欠損部では、内側の上面にノミでならした痕があり、破壊の後、二次加工されたものと思われる。また建物全体が北側に向かって傾いているので、敷居自体も当然北側がレベルが低くなっている。

全体の形状は、外側が円形になった内陣の壁に連続して円弧となり、内側は扉を納めるために直線となっている。端部は両側のオルソスタットとの突き合わせで、直線的に切れており、弓型の両端を切ったような形である。前面での部材最大長さは3.243 m、中央部での最大幅は約1.52 m、両端部の約0.5 mには立枠及びオルソスタットの端部がのっていたものと思われる。トイコベートからの上面の高さは、測り方によって1~2 mmの誤差があるが、あまり擦れていない西側前面の立枠の溝の側で、0.382 mである。前面最下部には高さ0.070 mのモールディングが2段に付いている。内側の扉が納まる部分は、幅0.181~0.184 m、敷居の上面から0.107 m (東側)、0.104 m (西側) 低くなっている。敷居のこの部分の内側面は、深さ

0.013 m、高さ0.057 mのかぶりをとっており、この下に床の大理石部材が入り込む形になっている。上面の内側縁は欠損し明確な縁の線はでない。

2-2 立枠の溝

敷居の両側には、入口の両側面を覆った、大理石の立枠を設置した溝の後がはっきりと残っている。溝の幅は東側で0.069 m西側で0.068 m、深さは0.019~0.020 m、外側では壁の線に沿って鋭角に曲がっている。内側でも敷居の内側に沿って直角に曲がっていたと思われるが、欠損して分からない。

入口の西側のオルソスタットはin-situで残っており、入口の形状に合わせて鋭角に削られている。しかし、このオルソスタットの内側端部と入口の立枠の痕跡の間には、敷居上面の仕上げ面があるだけで、どのような部材の取り合いになっていたかよく分からない。両側の立枠の溝の内側間の距離は、現在の状態で2.253 mである。敷居の石は中央で割れて隙間が開いており、当初の正確な開口幅は分からないが、この隙間は内側で0.015 m、外側で0.010 mほどなので、当初の開口部幅は、2.240 mほどであったろう。

2-3 内側の扉

前述したように、敷居の内側は0.206 mの幅で上面と0.115 mの段差がついており、扉はこの部分に納まるように取り付けられたものと思われる。この部分の両端にはそれぞれ2つずつのほぼ正方形の窪みがある。内側の窪みは扉の軸受けのためと思われ、東側が0.114×0.116 m、深さが0.008 m、穴の底面から0.022 mの高さのところまで、0.016 mほど敷居の内側に彫り込まれている。つまり軸受けが簡単に外れぬよう、引っかけりをつけたものと思われる。軸受けの部材は穴の北側と西側にかぶりがあったらしく、北側約0.013 m、西側約0.015 mの幅で穴の周囲が約0.001 m掘り下げられている。西側の軸受けの痕は0.110×0.114 m、深さは0.009 m、穴の周囲に幅0.008~9 mの深さ0.001 mほどの削り込みがあり、これが軸受けのかぶりの量と思われる。二つの軸受けの間の内法

1) 熊本大学助教授・工博 2) 都城高等助教授・工修 3) 熊本工業大学教授・工博 4) 国士館大学教授・工博 5) 前橋工業短期大学助教授・工博

間隔は2.170 m、敷居の中央で割れた隙間は内側で0.015 mなので、本来の内法間隔は2.155 mであつたろう。軸受けの矩形の穴の脇には、長方形の立枠の痕が残っている。西側の穴は大きさが0.081×0.194 m、深さは0.009 m、敷居の縁から0.030 m離れている。東側の痕は幅0.078 m、長さは不明、深さは0.008 m、縁から0.044 m離れている。

2-4 外側の扉

入口の外側には、もう1組の別の扉が存在した痕跡がある。非常に明確な円形の扉軸受けの痕が、入口両側のプテロン舗石(部材番号P38、P4。以下Pの記号はプテロン舗石の部材をさす。)に残っている。これが扉の軸受け痕だという根拠は、このような穴に設置されていたと思われる金属の軸受けが、マケドニアで発見されているからである。²⁾ P38の軸受け痕は直径0.112 m、深さは0.012 m、円周に沿って3カ所に約0.015×0.030 m、深さ0.024 mの矩形の彫り込みがある。P4の軸受け痕は直径0.115 m、深さは0.011 m、やはり円周に沿って3カ所ほぼ同様の大きさの矩

形の穴が彫られている。

円形の軸受け痕の中心位置は、敷居ののるトイコベート部材の端部に対応しており、また両軸受けの中心間の距離は直接は実測出来ないが、円弧上での距離として3.654 mとして計算される。

軸受け痕とトイコベートの間には、矩形の彫り込みがある。おそらく扉を支えるために、壁に沿って立てた方立ての痕跡だと思われる。大きさは幅0.101～0.103 m、長さは東側のもので0.141 m、西側のもので0.155 m。深さは、東側0.024 m、西側0.027 m、西側の方立てに対応する位置には、入口西側のオルソスタットの外側に矩形の縦長の穴が掘られている。おそらく、方立てを支持するためのブロンズの金具が取り付けられていたものと思われる。穴の周辺には、大理石の表面を少し粗くした痕がある。同様の穴のある壁石は、他にもう一つ発見されている。³⁾ 穴の大きさは、オルソスタット外側の入口の端部から0.291 mの位置、下端はトイコベートから高さ0.379 mの位置、穴の形状は幅0.024 m、深さ0.123 m、高さ0.130 m、

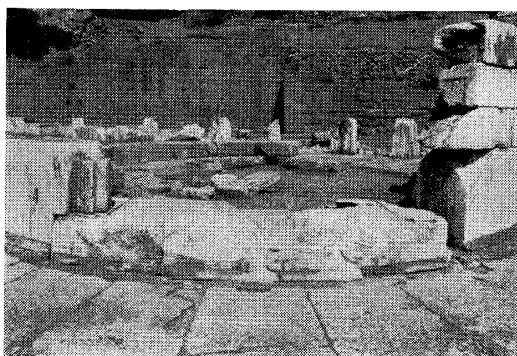


図1 入口全景

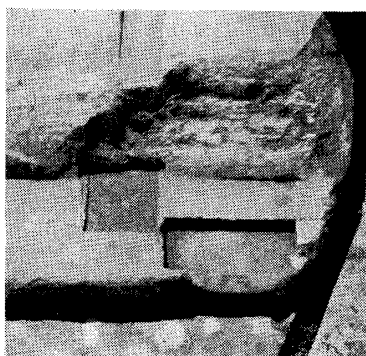


図2 内側扉の軸受周辺部

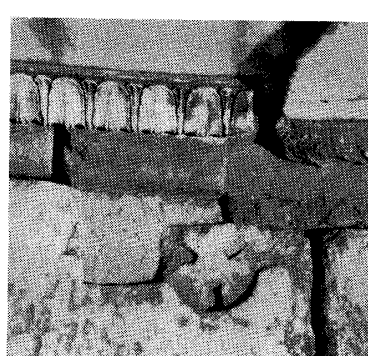


図3 外側グリルの軸受け

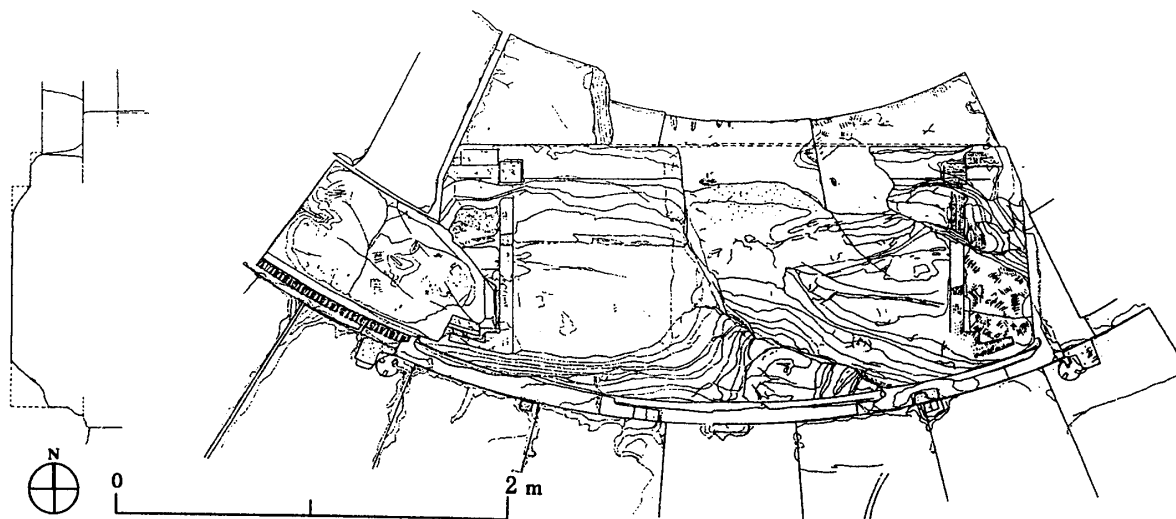


図4 トロス入口周辺部 現状平面図

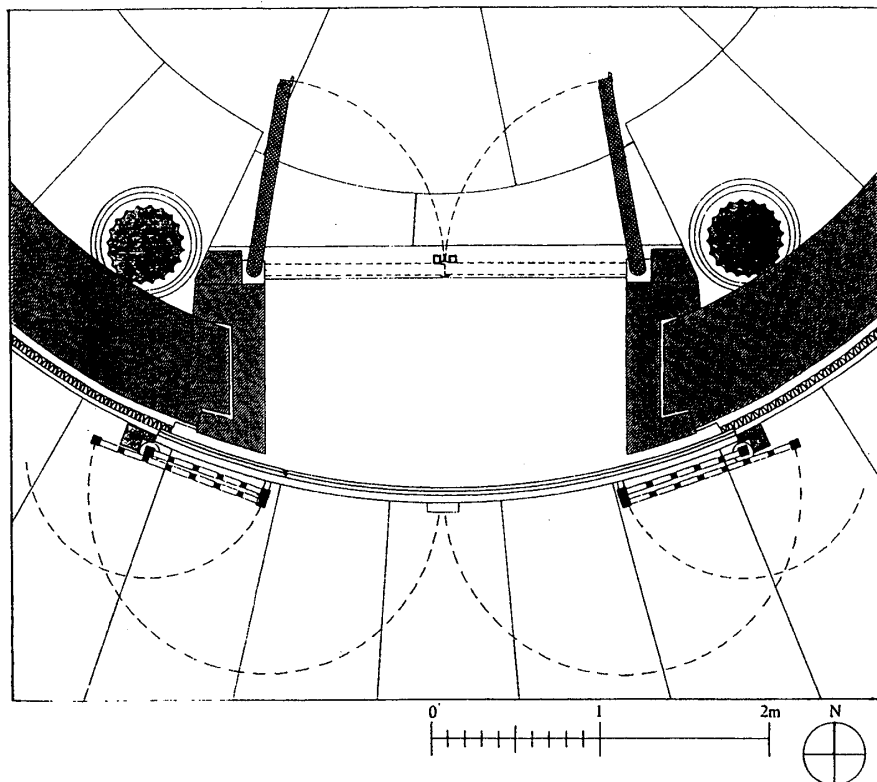
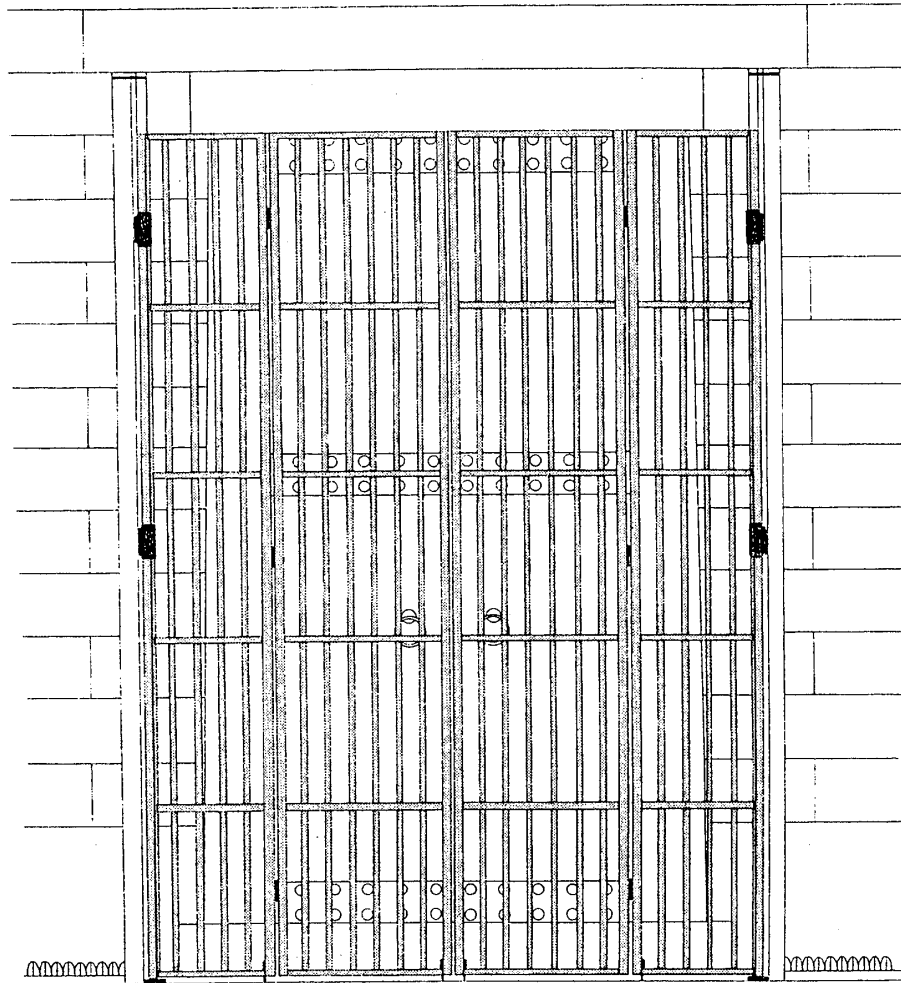


図5 入口周辺部復元平面図および入口外側立面図

穴の奥に行くに従って斜めに下がっている。

外側の扉と関連して、この扉を止めるためと思われる矩形の穴がプテロン部材に残っている。プテロン部材P1には、つまり入口の中心軸線上には、サイズは0.050 × 0.213 m、深さ0.030 m、P39には0.055 × 0.058 m、深さ0.027 mの穴、P3には0.031 × 0.070 m、深さ0.030 - 0.035 mの深さが2段になった穴が残っている。P39、P3に残る穴は扉の中間を固定するためであったものと思われる。

入口敷居の外側トイコベートには、やはり外側の扉を固定するためと思われる浅い矩形の穴が彫られている。一つは敷居トイコベートの西端から弧長で1.285 mの位置、大きさは0.062 × 0.130 m、深さ0.019 m、他の一つは敷居トイコベートの東端から0.705 mの位置、大きさは0.052 × 0.136 m、深さは東半分が0.023 m、西半分が0.031 mである。これらトイコベート及びプテロン舗石に残る矩形の穴はいずれも、軸受け痕に比べエッジが甘く、後で補ったものかもしれない。

3 入口周りの復元試案 - 結び

入口周りの現状に関して、シャルボノーの報告書は詳しく記述している。⁴⁾しかし、記述の詳細さに比べ、コットロブの復元図は、簡単なものであまり多くの情報を述べていない。⁵⁾内側も外側も扉は描かれておらず、軸受けの痕跡だけが描かれている。両側の立枠は、溝の痕跡にちょうどはめ込みになるような、薄いスラブがオルソスタットの端を覆っている。

シャルボノーの議論で一番問題なのは、扉は内開きではなく外開きであったとする点であろう。彼は、内開きであれば、1) 敷居は現状ほど幅がなくてもよいはず、つまり扉は現状ほど壁の内側に置かなくてもよい、2) 扉が90度に開かず内側のベンチの隅に当たってしまう、という理由で外開きを主張している。

確かに彼の主張どおりで、敷居の幅はそれほど幅広くはいらないであろうし、内側の正方形に近い穴が扉軸受けの穴だとして、外側に扉を開くと、ほぼぴったり敷居内に扉は納まってしまうのである。しかしながら、入口の扉に対する通常の考えからすると、彼の主張はいささか常軌を逸していると思われる。なぜなら外開きであれば、1) 何か事が合った場合に扉を閉じて、中の人や物を守るという扉そのものの思想に反

する、2) 扉が両側の立枠に当たって十分開けない、からである。ともあれ、シャルボノーは自説に基づいた復元図を描いていない。

ここでは扉は内開きとして、入口周囲の復元図を描いてみた。両側の立枠は浅いコの字型として、オルソスタットの端部を囲み、扉の軸が立枠の内側に納まってしまうような厚さとした。もう一对の長方形の穴はおそらく扉そのものを支える立枠であったと思われる、上部にこれにつながる上枠を載せ、扉全体を囲むようになっていたのだろう。ヴィトルヴィウスにしたがって、⁶⁾ 扉の高さは下部幅との比が11:24、横枠は高さを上下に2:3に分割する位置に配置した。

外の扉は、シャルボノーも述べているように、鉄の格子戸であり、通常は内側の扉を開けておき、参詣者はこの格子戸越しに中の様子を見学したものであろう。格子戸の軸受けの穴や、その軸を横から支える角柱を設置する矩形の穴、その角柱を支えた金具を内陣の壁に固定するために開けられた穴は、これらは全て丁寧に施工されており、後付けではなく、おそらく当初のものであった可能性が強い。格子戸は、パルテノンのプロナオスにも取り付けられていたことが分かっており、床に彫られた痕跡からすると、それぞれ二つ折りの格子戸であったと推定される。それにしてもやはり、この格子戸はいささか取って付けたものであったような印象は拭えなかったのではなかろうか。

本研究は平成8年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究・課題番号08041126、基盤研究(B)(2)課題番号07455250、及び日本学術振興会国際共同研究補助金による。遺構の写真測量については、(株)アジア航測の協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

注

- 1) フランス考古学研究所から出版された正式な発掘報告書としては、Charbonneau, J. "La Tholos" Fouilles de Delphes II, Le Sanctuaire d'Athéna Pronaia, Paris, 1925 がある。また出土遺構の及び復元図等の図面集として、同じシリーズのKotlob, K. "Relevés et Restorations", Paris, 1925 がある。
- 2) Heuzey, L. and Daumet, H. "Mission Archeologique de Macedoin", Paris, 1876, Pl.21 ヴェルギナのマケドニア墳墓の入口扉の軸受けが報告されている。
- 3) Kotlob, op.cit., Pl.16.
- 4) Charbonneau, op.cit, pp.14-17.
- 5) Kotlob, op.cit., Pl.27.
- 6) 森田慶一訳「ウィトルーウィウス建築書」東海大学出版会、第4巻6章1-6。昭和51年、